

学校名：横浜市立本町小学校

氏名：石川 舞

### 1. 今回の研修における目的やねらい

一番の目的は、タンザニアの教育システムを知ったり、学校現場を拝見したりすることで日本にある自分の学校を見直すことである。

また、観光では触れ合えない現地の方との交流を通して、アフリカのタンザニアの生活を肌で感じることである。これは、今回の研修でなければ体験しえないこととして大変楽しみであった。

### 2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

学校現場については、タンザニア JICA 事務所で教育についての事前研修・現地での校長先生の話・中等学校で教える隊員の話を通して、教育システムを知ることができた。また、幼稚園・小学校・2つの中等学校を視察・交流することで、どのような環境で教育がなされているか見ることができた。

### 3. タンザニアから学んだこと

①「カリブと相手を迎える気持ち」②「物を大切にすること」③「ゆったりと生活すること」である。

①は、車中から人々と目が合い、手を振ると手を振り返ってくれたり、道や店を歩いているときに「カリブ」とよく声をかけられた。また、モロゴロのホテルで蚊取り線香に火を灯すため、マッチを借りたが、最初の一本目で手間取ってしまった。すると、ホテルの方が「それじゃあ、火はついてないわよ。」と、蚊取り線香とマッチを手にして、火を灯してくれたのだ。お節介にも感じるが、外国人である私にとっては安心できたひと時であった。

②は、マセユ村でレンガ銀行から女性のアマニチームの活動地まで歩いている際、何軒かの家の庭を通り過ぎた。そこでは、たらいに水が貯められていたのだが、あるたらいの縁が大きく割れていて、通常の使い方では水を貯められないものであった。しかし、私が見たのはたらいの下に石を置き、斜めにさせて水を貯めていた。「使えるものは、工夫して使う。」そんな思いを感じた風景であった。

③は、せかせかと足早に歩くことが多い日本だが、急いであるく姿を見たことがなかった。車中からは、平日の昼間から道端で男性陣が数名たむろしていたり、木陰で座っていたりする場面をよく見かけた。「仕事がない。」というのが一番の理由かもしれないが、バガモヨの市場でも、捕えた魚を油で揚げる作業を見るに当たり、時間に追われて急いでいるという印象は受けなかった。「一日生きる分を得ればそれ以上は働かない。」というタンザニアの風潮は、未来を心配し「できるときに働けるだけ働こう。」とする日本の風潮と全く違って見えた。たとえ仕事がなくそこにいるとしても、ダラダラ過ごしている感じではなく、時間が過ぎることを楽しんでいるように感じたからだ。時間に追われる今の生活と比べると、ゆったりと腰を下ろし、過ぎていく風景を眺めて時間が過ぎるのを感じる姿がとてもうらやましく思えた。

### 4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

今回この教師海外研修を通し、子どもたちには「自分たちとは関係のない遠い国での出来事」ではなく、「友だちは、こんな風に暮らしているんだ。」と身近な存在であると思ってもらいたい。それは、身近な存在だからこそ「自分だったらこんな手伝いができるな。」という相手を意識した思いにつながると信じているからである。そして何よりも、子どもたちにとって身近な存在の教師が実体験をもとにその暮らしを語ることで、「世界は同じ」「世界はせまい」という身近さを子ども

もたちに実感してもらいたいと強く考えている。

## **5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案**

よかったことは、現地の村人や学校に行くだけでなく、たつぷりと交流をもつことができたことである。また、O&ODの現場を拝見するうえで、日本と比べた視点でタンザニアの仕組みを説明した内容は、イメージしやすく分かりやすかった。

提案としては、教師の研修なのでタンザニア1日目のブリーフィングで教育について、もっと詳しく話を聞きたかった。例えば、学校は建てられているとのことだったが、タンザニアの県がお金を出したのはどれくらいで、海外支援での学校はどれくらいとか。日本はどんな支援をしたのか。どのような国家試験がなされているのかなどである。

## **6. 海外研修での役割（日直や各担当）を振り返っての感想・提案など**

日直は、全員が一日の流れをしっかりと把握することで、自主性が生まれていいのではないかと思った。人数確認も少しずつチーム力が高まっていく一つの方法であると感じた。

交流担当としては、やりたいことをチームの中でたくさん出すことが大切だと感じた。受け入れる学校によって何ができるかは違うが、受け入れ体制を確認してからでは、内容を進めるのが遅れてしまったであろう。

今回、交流内容が盛りだくさんではあったと思うので、日本での話し合いの中から、交流の優先順位を意識し、「やれたらやろう。」という心持ちでいたのは良かったと思う。歌（ふるさと、マライカ、日本語・スワヒリ語）は、アカペラでもすぐに披露できたので、臨機応変に対応できるし距離が縮まる。ダンス（ソーラン節・ラジオ体操）は、盛り上がる。

ただ、こちらからの披露という形式が崩れず、「一緒になって行う。」というのは、難しかった。その意味でも、時間があるマセユ村やムグラシ中等学校で交流に遊びを取り入れたのは良かった。今後も授業交流だけでなく、昼休みの延長のような時間が交流の中でとれるとぐっと距離が縮まるであろう。

## **7. その他、研修全般を通じての感想・意見など**

普段の教育活動では出会えないであろう方たちとの一期一会の出会いがこの研修にはあった。

同じ職種の方とたくさん話すことは大切であるが、社会に出ていく子どもたちを育てていく観点からすると、もっと広い視野でものを見る視点を教師がもつことは大切である。

私は、海外に赴く際、可能な限り現地の小学校へ足を運び、見聞している。それは、日本とは違う文化や環境ではあるが、学ぶ子どもたちの笑顔や教える先生方のご苦勞がいろいろな場面から伝わり、「世界中どこだって 学びの根本は変わらない」と感じることができるからだ。

今回の研修では、見聞だけでなく交流の時間があり、「触れあえた」という実感をもつことができた。それも JICA の支援がなされているからであり、事務所の方たちの密な連絡ゆえに実現したことで、これは、自分の力では到底できない経験であった。

今回で最後にせず、今回以上の経験を海外での旅行で体験することが私の目標となった。

## **8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど**

アドバイスに、「まっさらな気持ちで研修先に行くのもいいのは。」という意見もあったが、私は日本にいる間にできるかぎり現地のことについて情報を得た方がいいと感じた。ただ、観光地としてマイナーなモロゴロやバガモヨなどは、調べてもホテルくらいしか情報が出てこなかったが、(本当は学校の位置や博物館について知りたかった) 現地を得る新たな情報は、盛りだくさんであった。しかも書籍やメディアには乗らないような、当事者だからこそ伝えられる情報やお話もあり、大変貴重であった。反省としては、ニエレレ大統領のことは勉強していったのだが、今のタンザニア政府や日本政府についての勉強が不十分であった。JICA の支援を知ったり、経済を考えたりする際に

政府の存在が大きいので、しっかりとした基礎知識をもって話を聞いたら、さらに深い理解ができたのかもしれない。

## 9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(日) -12日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドーハからタンザニアまでの飛行機は、肌の黒い方もいらしたが、インド系や中国系と思われる方がほとんどで、日本人の姿はほとんど見られなかった。日本での友次次長の話で、ダルエスサラームにインドや中国の銀行が多くあるという話とつながりがあるように感じた。</li> </ul>
8月12日(月)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝5:30頃、コーランの音が外から聞こえる。海側のダルエスサラームは、イスラム教が多くいる。日本の田舎で夕方5時ごろ流れる「蛍の光」のようである。</li> <li>・一人ひとり JICA 専門分野のお話は貴重であり、一時も力を抜けない時間であった。</li> </ul>
8月12日(月)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日一日だけでも、たくさんの情報を得ることができた。</li> </ul>
8月13日(火)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タンザニアの教育について興味があったので、その時間をじっくり取っていただけるとありがたかった。</li> <li>・O&amp;OD プロジェクトを通して、日本で会ったムボンデさんやブライアンさんの仕事がよく分かった。タンザニア政府からも期待されている立場であると再認識した。</li> </ul>
8月13日(火)	モロゴロへ移動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マンションやビルの建っていたダルエスサラームからほんの10分走らせるだけで、周りは草原、何キロかごとに家やお店が集まっている村があり、イメージしていたアフリカの風景だなと感じる。この辺りで栄えているのは一点の都市のみのようだ。</li> </ul>
8月13日(火)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幹線道路沿いにバケツ山積みの野菜が置かれている風景を多く見た。車が通るため、見せて売っていると思うが、どれくらい売れているのか。</li> <li>・木の陰で4,5人集まっている。何もしてないように見えるが、情報交換をしているのか。今日分の仕事を終えたからか。どんな話をしているのか聞いてみたい。</li> <li>・国家試験の進級テストにパスしなかった生徒はどうなるのか。親は悲しむのか、農業の働き手が増えて助かるのか。パスしたら、生徒は喜ぶのか、親は喜ぶのか、またお金かかるだろうという思いはないのか聞いてみたい。</li> </ul>

8月14日(水)	Maseyu 村 Mazizi 地区 サイト視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マセユ村に着くと村の方が握手して迎えてくださった。温かい雰囲気気持ちや和みんだ瞬間だった。</li> <li>・村の方は、行政官の方や議長、経済、管材、農業、安全などのリーダーが集まり自己紹介があった。</li> <li>・トラクターに乗り込み、20分ほどかけてマジジ小学校へ。道幅は3~4m程で平らな道も時にあったが、直径1m、深さ20cm程の穴がそこらじゅうにあり、シートベルトをしていてもお尻が浮いたり、顎が自然に上下に動いたりするような道であった。O&amp;ODの説明で「道路は村人も作れる」という話があったが、このような道のことなのだろう。田中専門家によると、この道でも中の上くらいの出来なのだという。「車が入れる道」ということは評価が高いのだろう。</li> <li>・マジジ小学校は、教師が13名程、女性は1名であった。教室も3~4つほどでグラウンドもテニスコートほどもない。とても小さい印象である。このような場所であるため、女性教師も派遣しづらいのだという。若い年代には、女性教師の存在がいい時もあるが、立地的な問題が教師の赴任状況に大きく関係していることは、すぐに解決することではなさそうだ。</li> </ul>
8月14日(水)	専門家との懇談会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田中専門家の話。行った先々で写真を撮っている。笑顔アップの写真も撮るが、生活風景も撮る。その1枚を見て「ん？なぜこうなっているのだろう。」と興味をもってもらえたらいい。もしかしたら、自分の写真が開発国について更に調べるきっかけになるかもしれない。とのことだった。</li> </ul>
8月14日(水)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・O&amp;ODでは、村人が自分たちの村を歩き、財探しから始めたのだそう。初めは、水の問題が優先順位1番であったが、集会を進めることで幼稚園造り（まさに建物造り）から始めることになったのだという。これは、自分達でレンガを作れる“CAN”と中等学校への進学率の低さ“NEED”がO&amp;ODの集会をすることで一本の線につながり、村人が自分達で決めた活動として取り組んだのだ。まるで、過疎化の村に観光客を呼ぼうとする日本の村興しに似ていると感じた。</li> <li>・今思えば、学校で学級活動という話し合い活動が行われていれば、自分達で課題を出し合い、取り組みの優先順位を決めることがファシリテータ</li> </ul>

		<p>一なしにできるのではないだろうか。そのためには、教師も巻き込んで O&amp;OD のプロジェクトを進めることで、教科書を使う教科だけでない授業の大切さを感じてほしい。</p>
8月15日(木)	Maseyu 村 Mjini 地区 関係者インタビュー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・村での農業では、具体的にどのように収入が得られるのか聞くことができた。今の時期であれば、トマトの収穫が終わった時期なので、10L はいるバケツにトマトを積み上げ、町まで行き 2000 シリング（日本円にしておよそ 100 円）で売れるのだという。また、農家では子どもというのは重要な働き手であるため、国家試験をパスしてお金のかかる中等学校に進むことは、一家にとって喜ばしいことであるのいか、痛手となるのか気になっていた。私がインタビューした 62 歳の男性は、「子どもが 6 人いて、3 人目の子が中等学校に行けそうなので、その子は進んでほしい。」と話してくれた。子どもが多く、教育の質が問題になっているタンザニアでは、1 人でも中等学校に進ませること自体が困難であると感じた。しかしこれは、教育が盛んば北部でないマセユ村だからかもしれない。</li> </ul>
8月15日(木)	小学校視察、村人との交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マセユ小学校の隣でやっている幼稚園へ。</li> <li>・建物がないため、青空教室で大きめの石に座って学習していた。私は幼稚園の免許をもっているため、日本では、遊びや工作、体験を通して学習を行うが、青空教室とはいえ、一斉指導の環境で、どんな学習をしているのか気になった。</li> <li>・モロゴロで、幼稚園の教科書を購入するが、この内容を教えているのか疑問が残る。</li> <li>・マセユ小学校へ。幹線道路脇の小学校ということもあり、マジジ小学校よりも規模は大きめだと感じた。</li> <li>・授業を視察したが、教師は黒板の前において自分が問題を解いていた。時々生徒に投げかけながらではあるが、自分たち一人ひとりで問題を解く様子もなければ、ノートに写しているそぶりもない。皆黒板の方を向いて、教師が解く様子を見ていた。挙手も多かったため、話をしっかりと聞き、内容を理解しているのだと思う。教師からの一方的な授業であり、塾のようだと感じた。</li> <li>・小学 2 年のクラスでノートを見せてもらった。足し算や英文が書いてあり、教師のチェック（丸付け）がされていた。まだ字に慣れていないけれども懸命に勉強しているであろうことが伝わって</li> </ul>

		きた。
8月15日(木)	市内視察 (モロゴロ) 本屋にて教科書購入 カンガ屋 スーパーマーケット 市場視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本屋に行き、幼稚園の教科書を購入した。他の教科の教科書も拝見したが、分厚く、白い紙にカラーの絵もあり、立派であった。私は、ホッチキスで留められるくらい薄いわら半紙かと思っていた。</li> <li>・タンザニアでは、本屋と言えば教科書が売っているのだという。そういえば、本屋の中に学校で使うであろうノートや文房具が売られていた。食品が売られているスーパー（ここでは、ジュース・紅茶パック・コーヒー・お米を購入）では、洗剤や玩具などは置いてあったが、文房具は売られていなかった。文字を学習しても読む本がないとのことなので、言葉を勉強する喜びを味わえるような本が子どもたちに行きわたればいいが、教科書がまず足りなくて、ぼろぼろになるまで使っているので、本となるとさらに先になりそうだ。</li> </ul>
8月15日(木)	隊員との懇談会 バガモヨの実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・翌日の交流内容確認。</li> <li>・ムグラシ中等学校は、県からお金が出ているが、お金がなく、いろいろ足りない状況だそう。建設途中（レンガの壁で屋根のない状態）の建物は、理科室になるようだが、一向に工事が先に進んでいないのだとか。先を見通して、進める計画力が低い国なのかもしれない。見切り発車な部分が多いように感じる。</li> </ul>
8月15日(木)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前日のマセイ村での聞き取りの情報交換。</li> </ul>
8月16日(金)	ムグラシ中等学校 赤堀隊員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校生徒を前にした挨拶では、私たちの名前を言うだけで笑いが起き、大変明るい生徒たちであった。</li> <li>・交流授業では、私は自分の名前を習字で書く体験を主に見ていたが、初めて持つであろう筆の感触を楽しみながら書いていたように感じた。</li> <li>・外での交流では、日本の学校の様子を写真や動画で見せた。大変興味を持ち、自分たちと日本の学校の環境の違いに驚いているように感じた。また、日本から持ってきた1年生の引き算プリントを見せると「私、できるわ。簡単よ。」と言わんばかりに問題を解き、日本から持ってきた鉛筆で書きたいと群がってきた姿にはパワーを感じた。（日本でいう中学校なので、10-3などの引き算は朝飯前であったらう。）最後に丸つけする時間は内ので、日本の判子をプリントの裏に押し返却した。整列して、順番を待つ文化がないと聞いていたの</li> </ul>

		<p>で、「ここ（自分の右側）に列を作ってね。」と言っても並ぶ様子は見られなかった。しかし、四方八方からプリントを出されても、「列を作ってね。」と言った方から判子を押していったが、「何で私のはやってくれないの。」などと不機嫌になる様子は全くなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後に学校を離れる際、「カメラ持ってる？私を撮って。」と積極的に声をかける姿が印象的であった。</li> </ul>
8月16日(金)	ミクミ国立公園通過 モロゴロへ移動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キリン、ゾウ、シマウマ、インパラ、ウシ、サバンナモンキーに出会うことができた。</li> <li>・動物園では、静止している姿が多いが、生息している地域だからであろう、動くというよりも移動している姿が見られ、動物たちが生き生きしていたのが印象的である。</li> <li>・インパラの群れが道路を横切っていた。道路は草原よりも少し小高いため、道路から草原はちょっとした坂になっている。坂を下るインパラはそのひとけりが大きく、あつというまに坂を下り、軽やかに草原へ向かっていた。</li> </ul>
8月16日(金)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ムグラシ中等学校での交流を振り返り、キパランガンダ中等学校での交流に活かす。</li> <li>・3つのクラスそれぞれで行うため、各メンバーでやることの確認。また、時間が限られているため、外での交流内容を厳選し、行うことになった。</li> </ul>
8月17日(土)	バガモヨへ移動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道中、「緑が多いな。」と感ずることがあった。すると、タンザニアに来て初めての川を見ることができた。ペリーさんの地図を拝見するとその川は、くねくねしていた。しかし、流れている様子はなく、細長い水の溜まり場のように、蚊が発生しそうであった。</li> <li>・バガモヨに近づくにつれ、家の屋根が乾燥させた植物ではなく、トタン屋根が見られるようになった。それなりにお金がないとトタン屋根は用意できないようだが、それも銀色に光っていたため、最近取り付けたように感じられた。モロゴロに比べ、比較的現金収入があるということなのだろうか。</li> </ul>
8月17日(土)	市内視察（バガモヨ） 昼食 奴隷博物館 市場 木彫りの民芸屋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お昼ご飯のお店は先週できたばかりだそう。内装もトイレもきれいだが、ハエがたくさん飛んでいた。今回はメニューを一人ひとり選んだ。ピラウ羊を頼んだが、ピラウの中に羊が入っているとのこと。しかしピラウサマキ（魚）の人と同じピ</li> </ul>

	海岸、魚市場 高台 音楽一家	<p>ラウに感じる。写真でのメニューがないため、残念。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・市内を歩くと人々がゆったり過ごしているように感じる。民芸屋さんで指ピアノとネックレスを購入。</li> <li>・海岸は、日本の港と全く違う風景で、日本では港だからこそ新鮮な魚が手に入るが、バガモヨでは、生では食べられないため、揚げる。つまり揚げたての魚が食べられるのだ。</li> <li>・海岸に停まっている船は木製で、まるで映画の撮影に紛れ込んだかのような光景にテンションが高まった。ここでは、この風景が日常なのだ。</li> </ul>
8月17日(土)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・魚市場。船に冷凍技術がなく、陸でも同じであると、魚を揚げて食しているのは自然の流れのように感じた。日本のように捕えてすぐに船の冷蔵庫に入れる方法は世界的に見ると珍しいのだろうか。</li> <li>・音楽一家。日本人に慣れているというよりも、人懐こく、写真に笑顔で入ってきた。NGOの日本人旅行者も来ているようで、手遊び歌のアルプス一万尺を知っていた。スワヒリ語の「ふるさと」を歌って、一番反応が良かったのはここである。スワヒリ語になると表情が明るくなり、(あ、知っている言葉を歌っている。)と言っているようであった。</li> </ul>
8月18日(日)	ダルエスサラームに移動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加藤隊員の話だと、バガモヨは水が比較的に手に入るようで、家の外に水道があったり、井戸から水を汲む光景が見られたりした。</li> <li>・バスに寄って来る物売りを見かけると、ダルエスサラームに来たのだとを感じるようになった。</li> </ul>
8月18日(日)	教材等購入 ティンガティンガ村	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工房と売場が一体となり、お客が通るすぐ目の前で絵を描いていた。</li> <li>・天日に工程途中の作品を乾かし、その横をお客が通るのも大胆だ。</li> <li>・私としては、作品ができあがる経過を見れるためありがたいが、もしかしたら汚れるかもとか、どこかへいってしまうかもなどは考えないのだろう。店内の写真撮影もOKであった。あまり細かいことを気にしないところがタンザニアらしい。</li> <li>・ここでは、看板(名前入り)・鉛筆を購入した。絵を購入したメンバーも多くいた。</li> </ul>
8月18日(日)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食は、タンザニア JICA 事務所の方(木全さん・大林さん)と共に。タンザニアの日本食レストラン</li> </ul>

		<p>ンは、寿司・揚げだし豆腐・天ぷら（人参・なす・エビ・玉ねぎ）・焼きそば風めん・餃子・韓国風シーフードサラダなどがあり、店内もきれいであった。厨房では、東洋人が作っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・限られた予算のため、時間はかかっても将来を見据えた支援を行っている印象を受けた。それは、タンザニアの人たちの自立ができるように模索しているという話からだ。</li> <li>・O&amp;OD で日本が出している予算は、ファシリテーターの人材育成（日本での研修費）や村での研修費である。インフレのように目に見えたり、多くの人々が直接触れたりするものでないため、支援が見えづらいが、ファシリテーターという言葉がタンザニアで一般化することで、「ファシリテーターは、日本が育てているんだって。」と日本の支援が広く知れ渡るのだろう。結果だけでなく、過程を大切にするところは、教育に似ているし、急がば回れ的なところが日本らしい。</li> </ul>
8月19日(月)	キパンランガンダ中等学校 米澤隊員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初のムグラシ中等学校よりも、イスラム教のお嬢さんが多くいた。（髪を白い布の覆っていた）そのためかは分からないが、全体的にムグラシ中等学校よりも落ち着いている生徒さんが多いように感じた。</li> <li>・電柱が先週学校まで建てられ、来週電気が通るといいと校長先生からお話があった。</li> <li>・昼食での米澤隊員との話で印象的だったのは、タンザニアの進級試験である国家試験の話題である。平均点を聞くと、100点満点とは思えないほどの点数で、生徒の中にも勉強に対しての将来が見えず、やる気をもてない子もいるのだという。私の考える原因としては、イギリスのシラバスを参考にした教育課程がタンザニアにはあるのだが、そもそもそれがタンザニアに合っていないようなのだ。それを基に国家試験が作られているので、このような問題が起きるのだと感じた。しかし、教育が盛んな北部の学校では、同じ国家試験でも高得点が取れてしまうのだというから、小学校にほぼ100%の児童が行けたとしても、「教育の質が問題」というタンザニアの教育課題を深く感じた。</li> </ul>
8月19日(月)	教材等購入 ダルエスサラームのスーパーマーケット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モロゴロのスーパーよりも広く、レジがあり、品物を購入するとビニールに入れてくれた。</li> <li>・食品、文房具、ベビーカー（赤ちゃんはカンガでおぶわれている姿がほとんどで、ベビーカー</li> </ul>

		ーを見ることがなかったが、売られていることが驚きだった)、斧までそろっていた。ここでは、缶ビールを購入した。
8月19日(月)	本日の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キパランガンダ中等学校での聞き取り情報交換。</li> <li>・意欲的な先生もいらっしゃるが、話を聞くほど学校の先生のやる気が低い印象を受ける。給料の少なさや自分の思いが実現できないこと（都会の学校に赴任したいのに、田舎の学校にいること）、北部の高学歴な地域出身のため、田舎の生徒に愛着がもてないのだろうか。目の前の子どもたちを何とかしようとする教師がいないと教育は意味がないのではないか。教育はあるけれども質の問題ということが頷ける。</li> </ul>
8月20日(火)	JICA タンザニア事務所 報告会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・O&amp;ODプロジェクトの取り組みをタンザニアの教育が知り、話し合うことの大切さを感じてくれば、日本でいう「特別活動」の領域がタンザニアの学校で指導されるのではないかと期待している。そうすれば、ファシリテーターも村に入っの集会を開きやすいのではないか、さらには、ファシリテーターがいなくても、教育がなされていれば、自分たちで集会を自主的に開くのではないか。教育の大切さを改めて感じている。</li> </ul>
8月20日(火)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の中だけでの幸福や発展はありえない。世界がライバルであるので、日本の枠に閉じこもることなく、子どもたちには、外に出ていける力をつけさせたいと感じた。</li> </ul>
8月20日(火) -21日(水)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タンザニアを夜に出発する飛行機のため、移動中は、睡眠をとることで時間をつぶすことができた。20日夜に出発し、日本に着いたらすぐに21日が終わってしまうことで、移動時間の長さを感じた。</li> </ul>